

佐藤

さとう まさとし

雅敏

さん



▲子どもにパスをする佐藤さん。生涯現役をかけた、子どもたちと同じ目線で練習を行う。

プロフィール

■佐藤 雅敏(さとう まさとし)さん/60歳/北陽在住/千歳ラグビーフットボール連盟理事長/昭和53年航空自衛隊千歳基地に配属後は選手、コーチ、監督、レフリーとして活躍/平成3年にはオール航空のメンバーとしてアメリカで米軍と試合/市スポーツ推進委員(18年目)

4年に一度のラグビーW杯が日本で初開催され、盛り上がりを見せています。日本中が熱狂する中、9月29日に千歳ラグビーフットボール連盟がスクールを設立。スクール設立に向けて長年の思いを実現させた佐藤理事長にお話を聞きました。

●ラグビーとの出会いは?

「中学卒業後、少年自衛官として入隊した航空自衛隊生徒隊で先輩がラグビーをしていたので、誘われるがままラグビー部に入部。体が小さく体力もなかったので辛かったです。1年生の冬にケガをして、しばらく練習ができませんでした。ますます嫌になりましたね。ラグビーを楽しいと思えたのが、4年生のときに配属になった小松基地での経験です。ケガ

も良くなりチームに混ぜてもらいプレーしたとき、『自分でもできる』という自信がついたのが大きいです。上手い下手は別として、一緒に喜べる環境が心地よかったです。」

●魅力や長く続けている理由は?

「ラグビーは1チーム15人でするスポーツですが、一人一人役割が違います。『One for All, All for One』とよく言いますが、ボールをつないでトライするためには、仲間のために、自分を張ってタックルする勇気が必要になります。だからこそ、仲間が認めてくれるし、リスペクトしてくれます。」

選手、レフリーとしていろいろな地域で大会に参加しましたが、そこには必ず仲間がいまし

ラグビースクール設立への思い



「自分を変えてくれたラグビーに恩返しをしたい。」

た。ひとりじゃできないスポーツ、それが、ラグビーの魅力だと思います。体が小さくても輝ける場所があり、全力プレーに對して認めてくれる仲間がいたからこそ、いまでも続けているんでしょね。それが仕事にもつながり、自分を変えてくれました。そんなラグビーに恩返しをしたいと思ったのがスクール設立のきっかけでもあります。スクールもひとりではできません。『作りましょう。一緒にやってみよう』と言ってくれた仲間や後輩に感謝です。」

●どんなスクールにしたいか?

「ラグビーの魅力を伝えると同時に、夢中になれるスポーツをするための土台作りの場所にしたいです。子どもたちの体や心の成長スピードは違います。スポーツを

するうえでスタートラインは人それぞれ。本当の勝負はスタートラインに立ってからだと思うので、そこまでにチャレンジすることの面白さやスポーツの楽しさを伝えることができばと思っています。もちろん、最終的にはラグビーを続けてもらいたいです(笑)。」



ラグビースクール設立は単なるスポーツの普及にとどまりません。仲間を大切に、他者をリスペクトする。試合が終われば『ノースサイド(敵味方関係なく称え合う)』。そんなラグビー精神こそ、これからのまちづくりに必要なのではないでしょうか。佐藤さんのやさしい瞳の奥にはスクールで学んだ子どもたちが、千歳の発展のために「トライ」する姿が見えているのかも知れません。